

# 16～18世紀におけるベトナム中部から日本への象貿易

ファン・ハイ・リン

## Elephant Trade from the Center of Vietnam to Japan in 16-18 centuries

PHAN Hai Linh

Elephants live in close proximity to humans in Vietnam and are a familiar sight. They have been portrayed in many artworks and in historical documents but have not yet been the subject of scholarly study. Recently, elephant faces extinction crisis in deforestation due to modernization. It can be said the fact that the elephant, which was the pride of Vietnamese nation, is no longer survive, has warned us the disharmony between human and nature, and the loss of traditional values in the globalization.

In 2010, in the paper entitled "Elephants image through Vietnamese historical materials and the event of Vietnamese elephants coming to Japan in 1728" the author has sketched out an overall picture of elephants in Vietnam, the context and reason why Vietnamese elephants was taken to Japan in 1728.

This paper focuses on the trade of elephants from the center of Vietnam to Japan in 16-18 centuries, especially the process of request, buying and the role of Vietnamese elephants in Japan.

キーワード：象、広南、享保一三年、通交、要請、売買、交流

### はじめに

2011年に出版された『大きな友達』と題した写真集には、現在、ベトナムで52頭の訓象しか生殖していないとの統計がある<sup>1)</sup>。また、VNExpressという電子新聞の2012年8月28日の記事によると、ベトナム全国ではわずか100頭の野生象が生息し、絶滅に直面しているという<sup>2)</sup>。それらの象は、アジア象のみだが、ベトナム各地の前史時代遺跡で出土した象骨は、アジア象以外に東方剣歯象やパラステゴドン象（ナウマン象の近縁）や南部象のものもあった。そして、金属器時代である中南部のサーフィン文化（紀元前1000年～紀元後2世紀）や、北部のドンソン文化（紀元前7世紀～紀元後1世紀）の遺跡では、象をモチーフにした銅鼓（写真1）、銅短剣、柄杓、ハーネスの銅鐘などが多く出土したことにより、人々が象を飼育し、動物狩猟に利用したり、荷物を運搬させたりしたことが知られてる。

---

1) 『大きな友達』、1頁。

2) <http://vnexpress.net/gl/khoa-hoc/2012/08/hanh-phap-khong-nghiem-voi-o-viet-nam-se-tuyet-diet/>



写真1：象を飾ったドンソン（東山）文化のゴックラク（玉楽）銅鼓  
タンホア省発見ベトナム歴史博物館

一方日本では、原始・古代の遺跡でマンモス象、ジャヴァ象、インド象、ナウマン象と青森象の骨歯が発見されたのは周知の通りだが、後に絶滅したため、中世時代に入ると、象が海外の珍しい生き物と見なされ、海外から運ばれ来た時には多く注目された。今までベトナム象が日本に運ばれたのは、慶長七年（1602）と享保十三年（1728）であったが、残念ながら慶長七年に渡来した象に関する資料が殆ど見つけられない。それに対して、享保十三年渡来象の資料がかなり多く残っている。

本論文は16～18世紀のベトナムと日本の資料を中心に考察し、日本に渡来した中部ベトナム象に関する要請やその売買、そして日本での旅と影響を論じてみたい。

## 1. 象への関心と要請

ベトナム、とりわけ中部における象の調教習慣は原始時代から始まり、古代・中世には広く人々の活動に使役されるようになった。その用途の主なものとしては、重い物品の運輸や山岳森林地域における交通手段、皇帝による重要な神事、行幸・行啓、軍事である。又、象は貴重な献上物と見なされた。18世紀の学者であるレ・クイ・ドン（黎貴惇）の著書『撫邊雜録』<sup>3)</sup>によると、中部のトアンホア（順化）州とクアンナム（広南）州では、「高五尺五寸」の牡象や象牙が税目として定められたという。黎貴惇は献象したダンチョン<sup>4)</sup>の各地方名を記し<sup>5)</sup>、「万象国」であるラオスもベトナムの国王に象を献上したと述

3) 本稿が参考した『撫邊雜録』（Phủ Biên tạp lục）は、社会科学出版社の1977年版行と教育出版社の2007年版行の『黎貴惇選集』（Lê Quý Đôn tuyển tập）の漢文版であるが、引用漢文は主に教育出版社の2007年版によった。

4) ベトナムは17世紀から18世紀末までクアンビン（広平）省のザイン河を境線に、ダンゴアイ（クアンビン省以北、鄭氏の支配地、トンキンと呼ばれる）、とダンチョン（クアンビン（広平）省以南、阮氏の支配地、交趾や広南とも呼ばれる）に分裂されていた。ダンチョンは中国から離れた地方との意味で、ナムハー（南河）とも呼ぶ。現在のクアンビン省からフエン（富安）省までの地域である。

5) 『撫邊雜録』第二巻、266、267、268、289、331頁。



写真 2：「安南国副都堂福義侯阮書」  
九州国立博物館  
（『大ベトナム展公式カタログベトナム物語』105 頁）

べている<sup>6)</sup>。イギリス人のジョン・バローも、18世紀末にナムハー（南河、所謂ダンチョン）において外国の使者が招聘される捕象行事がまだ行われていたと記述している<sup>7)</sup>。

上記の貴重な象が日本で関心を持たれた。少なくとも16～18世紀の資料の中でベトナム象に関する記録が見られている。先ず、九州国立博物館所蔵の光興14年（1591）閏3月21日付け「安南国副都堂福義侯阮書」（写真2）には、「前年見陳梁山就本國謂○國王意好雄象、有象壹隻／已付陳梁山將回○國王其艚小不能載、有好香貳株・雨油壹壹柄・象牙壹件・好紵貳匹寄與○有好好香貳株・雨油壹壹柄・象牙壹件・好紵貳匹寄與明年／隆巖又到本國謂、陳梁山并財物未見、茲有雨油壹壹柄再寄與○國王為信」と記される<sup>8)</sup>。これは当時ベトナムの中部を支配した阮氏より「日本国王」に宛てた最古の通交であると見なされる<sup>9)</sup>。興味深いのは、日本国王（豊臣秀吉のことだろうか）が雄象を好むことが当時ベトナムまで伝わったのである。それを日本の使者から聞いた阮氏は一頭の雄象を贈ったが、使者の船が小さくて象を運べないため、象牙など別の贈物を渡したという。

江戸時代に入ると、象のベトナムでどのような生活しているかも関心を持たれたようである。「茶屋新六交趾渡航図巻」<sup>10)</sup>の中で訓象と象遣いが描かれている。この絵図は、日本の長崎を出港した朱印船商人の広南州や都であるフェに至るまでの行程と現地住民の活動を生き生きと描写している。茶屋家は日本

6) 『撫邊雜録』第二巻、271頁。

7) 『1792～1793におけるインドシナへの旅行』、65頁。

8) 『大ベトナム展公式カタログ ベトナム物語』105頁。

9) 『大ベトナム展公式カタログ ベトナム物語』18頁。

10) この絵図は現在名古屋市の情妙寺に所蔵されている。著者は2013年10月19日に浄妙寺に訪問し、一教住職より絵図を閲覧と写真撮影をさせてもらった。掲載される写真はその時撮影された写真である。



写真3：広南象が描写された「茶屋新六交趾渡航図巻」 名古屋市の情妙寺

で呉服商を主とする豪商として知られていた。徳川家康に仕え、商人でありながら家康に各地の情報を伝える役目も担っていた。朱印船貿易において巨万の富を得ただけでなく、「大賢之客」としても高く評価されている。茶屋清延三男の新四郎長吉は尾張藩に下り、尾張茶屋家を創設し、慶安2年（1649）に情妙寺（名古屋市）を創建した。新六郎は尾張茶屋家2代目で、初代新四郎の子にあたる。彼は阮氏より「瀧見観音図」と半鐘を贈呈されたと伝えられる。「茶屋新六交趾渡航図巻」は単なる絵図でなく、ベトナムの状況を反映する報告書でもあると言えよう。その絵図左端の上角には河岸で象使いに調教される3頭の象が描かれている（写真3）。この風景は、当時のベトナムにおいては見慣れたものであるが、日本人にとっては特に関心と呼んだのであろう。3頭の象は、均整がとれ、自然な様子や、象遣いの象に乗る様子から見ると、画家は真近で象を見たと推測される。3頭の象のうち、2頭の象は白く、一頭の象（中間に描かれる）は灰色である。色の表現は、偶然という訳ではないと思う。つまり、象は長生きの動物であり、野生状況では200年も生きられる。訓象の寿命はより短くなる。約100歳になると象の灰色の毛が落ち、白い肌が見えるようになるから「白象」と呼ばれる。又、生まれつきで白い毛がある象が非常に珍しいものと見なされる。白象は普賢菩薩の乗り物で、国家の力を象徴するものである。茶屋家の絵図において象と象遣いが、茶屋家の海上、陸上の行程や、ベトナム国王への表敬様子と並べて3つの姿で描かれることより、幕府に報告するために重要な項目と見なされたと言えよう。

冒頭に述べたように、江戸時代にはベトナム象が2回運ばれて来たが、享保13年（1728）に牡と牝が中国の商船により、広南から日本にわたり、長崎に上陸したという事件が資料で多く注目されている。おそらくその理由の一つは、これらの象が海外の皇族や商人の献上によるものではなく、将軍徳川吉宗（1684-1751）の要請によってもたらされたからであろう。江戸幕府の要請は、嘉永6年（1853）に林復斎等が編集した『通航一覧』に載せられた第38番東京<sup>11)</sup>船主の呉子明の手紙に記されている。「蒙問委帶

11) ベトナムの北部、所謂ダンゴアイ。

小象、可以帶來否、但此獸出在暹羅地方、唐山各省並無、若蒙諭委帶、遵依帶來進上」<sup>12)</sup> とある。ここで注目すべきなのは、当時ベトナムのダンチョンやダンゴアイでも訓象が多く使われ、ダンチョンで捕象の習慣や、象の売買がよく行われていた。呉子明自身はダンゴアイの人であるが、幕府に象を献上するためにベトナム産でなく、暹羅から運ぶと提案したことである。これで、ダンゴアイには官象（朝廷の訓象）があるが、象の売買はダンチョンほど行われていないことと、ダンゴアイの人である呉子明にとってはダンチョンから象を買うより外国の暹羅から買ったほうが便利であることが伺われる。つまり、この手紙は当時ベトナムの南北分裂がどのように激しかったのかを間接的に反映していると言えよう。

結局、2年後象が運搬されて来たが、その船主は呉子明ではなく、享保13年第15番唐船の船主の鄭大威である。また、寛政七年（1795）から2年間長崎奉行所に勤務した近藤重蔵<sup>13)</sup>の書いた『安南紀略藁』に記述された「鄭大威が牽渡広南産ノ象牡牝二疋享保十三申年六月十三日長崎入津」<sup>14)</sup>とあるように、運搬された象が暹羅産でなく、広南産であった。このことから、当時幕府は一人の商人や使者でなく、象の要請を広く船主達に要請していたことが考えられる。

## 2. 象の売買

ここで象がどの目的で、いくら価格と、どのような年齢のものが売買されたかについて考えてみたい。

ベトナムで3年間（1627～1630）キリスト教を布教したアレクサンドル・ドゥ・ロード（Alexandre de Rhodes）司教は、「安南によく見かける家畜」と題した一巻の第十五章で象について詳しく述べている。それによると、当時ベトナムで飼育される象は国内で捕獲したものもあれば、ラオスから購入してきたものもあったようである。ベトナム人は高い金額で外国人に象を売ったと記している<sup>15)</sup>。そして、黎貴惇の『撫邊雜録』には、ラオスとの国境に位置するカムロ（甘露）地方の市場<sup>16)</sup>では「一象可載米三十擔、每擔二十鉢、亦有一市番、驅牛至、三百隻來売、一牛不過十貫、一象價銀二笏」<sup>17)</sup>と記述されている。黎貴惇は1笏は10両であるとも述べている。興味深いことに、17世紀ベトナムに来たジャン・バティスト・タヴェルニエによると、安南で使用された銀は日本銀と同様であったという<sup>18)</sup>。近藤著『安南紀略藁』には運搬された象の2頭の図の前に、「安南板銀」と呼ばれたベトナム銀の絵が載せてある。「掛目凡百日程」との注がある<sup>19)</sup>。当時100目は10両に当たることから、描かれた板銀は黎貴惇の述べた笏であることが連想できるだろう。もしそうであれば、ベトナムで売買される象の価格は日本の20両に相当す

12) 『通航一覽』第四、卷之百七十五、520頁。

13) 近藤重蔵ともいう（明和八年～文政十二年）。江戸時代の幕臣、北方探検家で有名である。編著「辺要分界図考」「金銀図録」「右文故事」「憲教類典」「外蕃通考」「外蕃通書」など。

14) 『安南紀略藁』22頁。

15) 『トンキン王国歴史』51～53頁。

16) 現在のクアンチー（広治）省にある。

17) 『撫邊雜録』第二卷、271頁。

18) 『トンキン王国の興味深い新しい旅行記』、38頁

19) 『安南紀略藁』27頁

ることになる。但し、これはベトナム国内市場の価格である。それでは象が日本まで運搬した時、どのくらいの金額がかかったのであろうか。

『通航一覽』に載せられた呉子明の手紙には「一象其带来、小船不堪装載、徒新定造大船二艘、每艘只装得一隻、但欲定造大船二艘、要用銀一萬餘兩、又唐山發船到暹羅、往来雜費、該用銀二萬餘兩」<sup>20)</sup>とある。ここに見る銀2万余兩は象の暹羅での購入と、日本への運搬に関する見積もりであろうが、実際、鄭大威が広南から象を運んだ時、幕府がいくら支払ったかについての資料はまだ見当たらない。もし暹羅からと同じ費用とするならば、ベトナムで売買する金額より千倍高くなるであろう。

『安南紀略藁』には先ず、「象之益者出戦之時、先備へに相立申候。牡象三歳に成り、乳放し致候、而から段々教込熟練いたし候。而後出陳之節、筒重さ四十八貫目程石火矢を一挺臺に仕掛け、象の背の上に置き、象遣ひ二人騎り居り候。而則石火矢を打放し懸け仕候（中略）牡象は十五、六歳より軍用に立、牝象は種を取候迄に而、軍用には立不申候」<sup>21)</sup>と記されている。鎖国体制を維持しながら、享保改革を主張し、熱心に中国の書籍を購入した第八代将軍徳川吉宗の、大陸で力強い武器として活用される象と、その戦闘技術を実見する期待がこの記述で伺えるであろう。また、幕府は上記のように象を長い間にわたり唐船の船主達に請求し、高額でも牝牝2頭の象を購入したことから、象を日本で長期にわたり飼育するつもりだったと言えよう。

渡来した広南象の特徴も絵図とともに記述された。『安南紀略藁』には「牡象 広南産 八年前寅年生ル 灰毛 爪五ツ 前足ノ方高五尺六寸餘（中略）牝 広南産 六年前辰年生ル 灰毛 爪五ツ 前足之方ニテ高四尺八寸餘 頭際ヨリ背尾際マテ長五尺三寸餘」<sup>22)</sup>と記された。ここで、牡象の高さに注目したい。近藤重蔵は「五尺六寸餘」と述べたが、『通航一覽』は「五尺五寸」と記した。但し、象が渡来して翌年（享保14年）に著された『象志』によると、牡象の高さは「五尺七寸」である。享保の尺は約30.3センチであることから、その高さは1.7メートルになる。前述したレ・クイ・ドン著『撫辺雜録』に、ベトナム中部の各地方の税目で象と象牙が定められた。国王に献上する牡象の条件は「高五尺五寸」とある。渡来牡象も同じ背丈であったことから、献上象も牡象と同じ年齢であろう。言い換えれば、献上象も7,8歳ぐらいだと考えられる。「牡象は一五、六歳より軍用に立」とあるから、日本に渡来した牡象もベトナム市場で取引された象も調教時期に入り始めた年齢で、陸上の引率や海上の運搬に便利である大きさにあったことが判断できるであろう。

### 3. 日本における象の影響

長崎に着いた3ヵ月後に牝象は気候や食物が合わないため死んでしまった。すなわち「此牝象去年長崎ニ於テ死ナリ。菓子ノ甘物ヲ多喰、舌ノ上ニ物ヲ生ス。象奴療治スルニ適ズ、長崎ニ豪気ナル者有テ、

20) 『通航一覽』第四、卷之百七十五、521頁。

21) 『安南紀略藁』22頁。

22) 『安南紀略藁』28頁。

舌ノ上ノ病ヲ濯取ニ、象快然トメ振尾喜カ如シ。然モヨッテ遂斃ルナリ」<sup>23)</sup>とされている。

残った貴重な牡象が旅するために、各地方へ御触書が發布された。そのなかに「此度御用之象壹疋、江戸え被差立候間、入用之品并人馬無滞可被差出候、大坂迄之泊付記之候へ共、風雨強節、或大里ニテ之船渡、汐時之考も有之候ニ付、自然二三日之遅滞ハ可有之哉と存候」<sup>24)</sup>といった詳細な指示もある。実は牡象がその後14年間も日本で飼育された。その期間、多くの記録が著された。特に享保14年には象の行った各地方で版本や詩集が多く出された。京都には本国寺塔頭智善院の『象志』以外、中村三近子の『象のみつぎ』や、『詠象詩』、白梅園の『靈象貢診記』、『献象来歴』がある。大坂では油煙斎の『家津登』が有名である。江戸では林大学頭榴岡の『馴象編』や林家塾頭井上蘭台の『馴象俗談』、神田白竜子の『三獣演談』などが著された。その他、尼崎藩の岡本俊二の記録も興味深い。それらの史料に基づき、以下の表が作成できる。

表 ベトナム象の日本での行程に関する主なできごと

|           |                         |
|-----------|-------------------------|
| 1728/6/13 | 長崎に象を乗せた船が到着            |
| 1728/6/19 | 牝象と牡象 二頭上陸              |
| 1728/9    | 牝象死ぬ（5才）                |
| 1729/3/9  | 長崎藩が藩内の各地に象を迎える準備に関して通知 |
| 1729/3/13 | 象、長崎を発つ                 |
| 1729/3/22 | 象下関を発つ                  |
| 1729/3/22 | 尼崎藩の通知が郡により村々へ伝達        |
| 1729/4/18 | 象兵庫に逗留                  |
| 1729/4/19 | 象尼崎に逗留                  |
| 1729/4/20 | 象大阪到着                   |
| 1729/4/20 | 象京都入り、宮中に参内             |
| 1729/5/4  | 象横浜到着                   |
| 1729/5/25 | 象江戸到着、浜御殿に逗留            |
| 1729/5/27 | 象江戸城入城、徳川吉宗に拝謁          |
| 1730/3    | 幕府、象の売却を公示              |
| 1741/4    | 象を源助に「お預け」、中野村で飼育       |
| 1742/12   | 牡象死ぬ（22才）               |

（月日は旧暦である。以下同じ）

特に4月28日に象は御所（京都の皇居）に入り、中御門帝（1701-1737）と、霊元上皇（1654-1732）に謁見した。『江戸名所図解』によると、天皇と上皇への拝謁のため、象は「広南従四位白象」に叙せられたという。しかし、この本は文政12年（1829）、すなわち100年後に記されたものであり、18世紀の史料はどれも象への官位に触れていないため、この詳細に関して疑問視する声もある。いずれにせよ、象の天皇への拝謁は重要な事件であったに違いない。中御門帝と法皇と公家たちは象に関する和歌を詠ん

23) 埼玉県立博物館：『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』、2000年、70頁。

24) 山下幸子著「享保の象行列」、尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年、70項。

だ。なかでも中御門帝の、「時しあれば 人の国なる けたものも けふ九重に みるがうれしさ」<sup>25)</sup> という和歌が有名である。

5月25日に象は江戸に到着して、浜御殿（浜離宮内）に入った。27日に徳川吉宗は、五位以上を叙せられた者に対し、江戸に入城とともに象を見学するように命じた。そのため、約2ヵ月（73日）中歩き続けた象は、将軍にお目見えした。吉宗はその後、何度か象のもとを訪れ、象使いが象に乗る様子を観察したり、自ら象にえさを与えたりしたという伝説が残されている。しかし、次第に吉宗の象への関心は薄れ、象の飼育に関する出費に頭を悩ませるようになった。牡象はその後13年間浜御殿で飼育された。象は日増しに成長して飼育費は増大し、一方で健康と性格は不安定だった。寛保元年（1741）4月、象は気を荒らし、象使いを叩き殺した。この事件により、幕府は源助に、中野村<sup>26)</sup>で「お預け」とした。当初は人々はわれ先にと象見物に訪れ、象に関する製品を多く買ったが、そのうち見物人は減り、象の餌は貧弱なものとなり、象は弱っていった。1742年12月、象は死んだ。幕府は象の皮を引き取り、頭の骨と象牙は源助に払い下げられた。源助は引き続きそれらを見世物にしようとしたが、後に寝たきりになり没した。

象の日本滞在中、民衆の特別の注意を引き起こすこととなった。人々は象は神聖な動物であり、象を見るだけで病気を追い払うことができるとうわさした。また、普賢菩薩の象の背に乗ったモチツフが絵まで描かれた。象の様子を描写した本や詩（写真4）、瓦版、象の姿を彫った刀のつばといったものは、非常によく売れた。源助が象万頭や、象の糞を乾燥させたものを「象洞」と称し、「疱瘡の薬」として淀橋で販売した。象の死んだ後でもその崇拝が続いていた。30年後、安永8年（1779）、宝仙寺は、象頭骨と象牙を17両で買い取り、参拝客の増加を狙って寺の境内に展示した。しかし、昭和20年（1945）、宝仙寺は空襲で被災した際に、骨もまた焼失したという。象皮に関しては、宝仙寺に保管された説がある<sup>27)</sup>が、2005年11月に奈良女子大学と古梅園の出した『古梅園文庫展』によると、奈良の古梅園は寛保3年（1743）に象皮と鼻は幕府より与えら、皮から有名な「香象墨」を造ったが、鼻を今でも古梅園で保管されていると

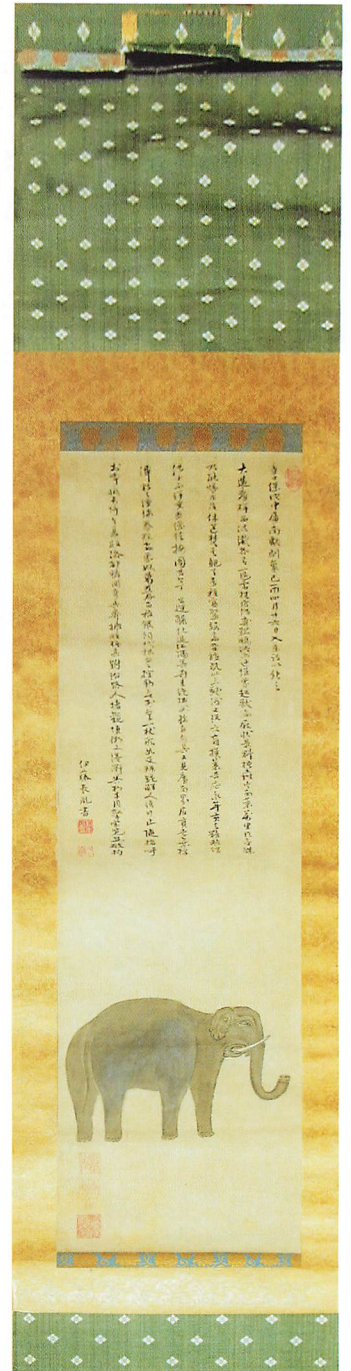


写真4：「渡来大象之図」

伊藤東涯賛

関西大学図書館

25) 『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』、70頁。

26) 現在の東京都中野区。象の檻は、現在の朝日が丘児童館の公園の場所に作られた。

27) 『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』、82頁。

いう<sup>28)</sup>。

象の日本滞在中、その故郷であるベトナム中部も日本で関心されるようになった。「廣南山中に居申候象、自然は田畑を荒候儀に有之候得共、人家に飼馴候象は田畑を荒しいたつら致候由に無御座候」<sup>29)</sup>とあるように広南における象の調教法とともに、人々の生活習慣も当時の日本の文献で詳細に記述されている。本島知辰編『月堂見聞集』には「象奴、広南の 潭数 歳四十九、潭錦三十一、通詞漳州の人李錦明五十八才、広東の人陳阿卅八才、右兩人は象詞に通詞仕、日本にも通じ申候」<sup>30)</sup>と記された。象が日本に着たばかりのとき、象を直接に調教した広南人2人と、広東人の通訳者2人が同行していた。しかし、江戸城に入った時に、「長崎者四人皿沙ノ帷子に立付ヲハキ、鳶口ヲ持テ象ニノル」<sup>31)</sup>とあるように象遣いは長崎の人に換わった。つまり、約一年間で、象はベトナム語、しかも広南方言の指示しか解らなかった状況から、日本語の指示を理解するようになった。近藤によると、「象を遣ひ候義不斷付添仕習し申候は、凡百日程には遣ひ候義仕習背申候。象広南言葉斗聞知、日本之言葉は聞知不申候。日本人二人程不斷付添何事に而も、最初に広南飼にて一通り申聞、其跡にて亦同し事を日本の言葉を以教込候は、漸々には日本言葉聞知可申候」<sup>32)</sup>とのプロセスが行われた。象は広南語・中国語・日本語といった二重通訳を仲介した段階から、日本語を練習され理解できるようになった。勿論それにより、象に直接関わった日本人の象遣いなどもベトナム語の理解がある程度できたのであろう。

このように、象は日本滞在中、越日交流とりわけ習慣と言語の交流に役割を果たしていたと言ってよからう。

## おわりに

ベトナムから日本に渡ってきた広南産の象は当時ベトナムと日本との交流にある役割を果たしていた。今まで私たちは両国の交流史を追究する時、使者派遣や通交などに注目したが、モノやイキモノの交流も重要な意味を持つと言えよう。

ベトナム象は一時的に長崎から江戸まで日本の各地において騒動を及ぼした。象の注文や行列、象をモチフにした出版物、製品などをみると近代以降世界の注目を集めた日本人の創造力や日本のソフトパワーやキャラクター文化が前近代からも固まってきたと考えられる。

ベトナムにおいて、象は古くから人々に馴染な動物である。牡象が朝廷に献上され、王城や軍隊で調教されていた。19世紀まで、象は戦時の勝敗を決めるほど重要な軍事力であった。また、象は貴重な贈物として外国に贈られていた。その象が21世紀に入ると人間と共に生き残れなくなってきたこと自体、グローバルゼーションにおける人間は自然との調和、伝統的な価値に対する意識を失っていることを警告してくれるのではなかろうか。野生象や馴象技術と共に、自然との生き方を後世に伝えることは今、

28) 古梅園と奈良女子大学編 『古梅園文庫展』、2005年。

29) 『安南紀略藁』24頁。

30) 山下幸子著「享保の象行列」、尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年、68頁。

31) 『安南紀略藁』28頁。

32) 『安南紀略藁』24頁。

私たちの重要な責任であろう。

### 主な参考史料と文献

1. アレクサンドル・ドゥ・ロード (Alexandre de Rhodes、1651) 『トンキン王国歴史』 (*Histoire du Royaume de Tunquin*) のベトナム語翻訳版、ホン・ニユエ (Hong Nhuệ) 訳『ダンゴアイ王国史』 (*Lịch sử vương quốc Đàng Ngoài*)、ホーチミン市出版社 (NXB Thành phố Hồ Chí Minh)、1994年。
2. 尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻、第2号、1972年10月。
3. ベトナム社会科学院漢喃班 (Ban Nghiên cứu Hán Nôm) 編『ハノイ碑文撰集』 (*Tuyển tập văn bia Hà Nội*)、社会科学出版社 (NXB KHXH)、1978年。
4. 中華書局『宋本太平寰宇記』、2000年。
5. 陳荊和編校『校合本 大越史略』、創価大学アジア研究所、1987年。
6. 林復斎等編『通航一覽』第四、卷之百七十五 (清文堂、1967年)。
7. ジャン・バティスト・タヴェルニエ (Jean Baptiste Tavernier、1681) 著『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』 (*Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin*) ベトナム語翻訳版、レ・テウ・ラン (Lê Tư Lành) 訳 (Jean Baptiste Tavernier: Tập du ký mới và kỳ thú về vương quốc Đàng Ngoài)、ハノイ世界出版社 (NXB Thế giới, Hà Nội) 2005年。
8. ジョン・バロー (John Barrow) : 『1792～1793におけるインドシナへの旅行』 (A voyage to Cochinchina in the years 1792-1793)、ロンドン (London) 1806年のベトナム語翻訳版、グエンツァヒー (Nguyễn Thừa Hỷ) 訳 (Một chuyến du hành đến xứ Nam Hà trong các năm 1792-1793)、ハノイ世界出版社 (NXB Thế giới) 2008年。
9. 近藤守重『安南紀略藻』、国書刊行会編『近藤正斎全集』雀羅書房、1906年。
10. 黎貴惇 (Lê Quý Đôn) 著『撫辺雑録』 (Phủ Biên tạp lục)、ベトナム社会科学出版社 (NXB Khoa học Xã hội) の1977年の版と、『黎貴惇選集』三巻『撫辺雑録』 (Lê Quý Đôn tuyển tập, tập 3: Phủ Biên tạp lục phần 2) 教育出版社 (NXB Giáo Dục) の2007年の版。
11. NHKプロモーション編『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』、NHK、1995年。
12. 阮朝国史館 (Quốc sử quán triều Nguyễn) 編『欽定越史通鑑綱目』 (Khâm định Việt sử Thông giám Cương mục)、ベトナム漢喃研究所図書館蔵本 VHV. 2632/1-2 (Viện Nghiên cứu Hán Nôm VHV. 2632/1-2)。
13. 埼玉県立博物館編『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』 (埼玉県立博物館、2000年)。
14. サムエル・バロン (Samuel Baron) 著「東京王国の描写」、『航海と旅行のコレクション』第3巻 (Description of the Kingdom of Tonqueen, in A Collection of voyages and travels, Vol 3)、ロンドン1732年。
15. スァ・ナイとエンター・ベトナム (Tập chí Xưa Nay và Enter Vietnam) 編『大きな友達』、(Những người bạn lớn)、2011年。
16. ウィリアム・ダムピアー (William Dampier) 著『旅行と発見』 (Voyages and Discoveries) ロンドン、1931年のベトナム語翻訳版、ホアン・アン・ツァン (Hoàng Anh Tuấn) 訳 (Một chuyến du hành đến đàng Ngoài năm 1688)、世界出版 (NXB Thế giới) 2006年。
17. 山下幸子「享保の象行列」(尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年)。
18. 山下恒夫再編『石井研堂コレクション江戸時代漂流記総集第二巻』 (日本評論社、1992年)。